

日本の宗教連合組織と新宗教の国際展開

隈元正樹

はじめに

日本には多くの新宗教と総称される教団があるが、その中には新宗教の教団同士、あるいは仏教宗派やキリスト教の団体などと連携して、国際活動をしている宗教団体がいくつかある。諸宗教の世界的連合組織として、日本にも加盟団体があって、比較的知られているものとして、国際自由宗教連盟（IARF）、世界宗教者平和会議（WCRP / RfP）、世界連邦、国際宗教同志会（IRF）などがある。これらの組織に加わっている場合は、日本の新宗教教団も国際的活動に加わる機会が多くなる。

戦後 1951 年に結成された新日本宗教団体連合会（新宗連）は、2019 年現在加盟教団数が 64 であり、新宗教教団の連携の大きな基盤になっている。新宗連は神社本庁、教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会とともに、日本宗教連盟に加わっているため、そこでの連携も若干ある。新宗連はそれ自体が国際的活動を行うと同時に、そこに加わっている団体がいくつか協力しあいながら、国際的活動を行って来ている。

本稿では主な国際的組織の活動と新宗連及び新宗連の加盟教団の国際的活動を、その連携の背景にも触れながら、近年の動向を紹介する。

1. 国内外の宗教連合組織のもとでの諸活動

1-1) 国際自由宗教連盟

国際自由宗教連盟（IARF：International Association for Religious Freedom）の歴史は 1 世紀以上前にさかのぼる。シカゴ万博（1893 年）の際の記念事業として開催された「万国宗教会議」を前身とし、1900 年に米国のボストンで創設された国際的宗教協力団体である。現在は、国連経済社会理事会に総合諮問資格を有する国連公認の NGO（非政府機関）になっている。本部事務局を大阪に置き、ニューヨークとジュネーブに国連代表を、インド、フィリピン、ア

アメリカに地域事務局を置いている。2018年現在で27カ国の75教団が加盟している。2002年の第31回まではほぼ3年に一度、以降は4年に一度世界大会を開催してきている。

日本でIARFに加盟しているのは次の6教団である。一燈園、金光教泉尾教会、総本山四天王寺、玉光神社、むつみ会、立正佼成会。これに個人会員の団体である日本チャプターと、IARFと友好関係にある国際的女性団体のIALRWを含めて8団体で構成されている。JLC（Japan Liaison Committee = IARF日本連絡協議会）として活動を行っている。

IARFと日本との関わりは、1952年に英国オックスフォードで開かれた第14回世界大会に、日本自由宗教連盟（今岡信一良会長）が加盟したことにはじまる。1958年に米国シカゴで開かれた第16回世界大会では、金光教の代表者として、当時の佐藤博敏教監が初めて参加した。また米国ボストンで開かれた1969年の第20回世界大会において、金光教泉尾教会、立正佼成会、椿大神社が加盟した。

1984年の第25回世界大会が東京で開催されたが、これはアジアで初の世界大会開催であった。このとき、当時の庭野日敬立正佼成会会長がIARF会長に就任した。

21世紀に入って、次のように世界大会が開かれた。

2002年、第31回世界大会がハンガリーのブダペストで開催。テーマは「宗教的自由：ヨーロッパの軌跡」。

2006年、第32回世界大会が台湾の高雄で開催。テーマは「多様性における尊厳」。

2010年、第33回世界大会がインドのコーチで開催。テーマは「対立を超えて和解へー21世紀への挑戦」。

なお、この年、三宅光雄金光教泉尾教会会長がIARF会長に就任した。

2014年、第34回世界大会が英国のバーミンガム大学で開催。テーマは「デジタル時代における信教の自由の挑戦」。

2018年、第35回世界大会が米国のジョージ・ワシントン大学で開催された。

なお、この大会は後述する「万国宗教会議」、RfP（Religions for Peace=世界宗教者平和会議WCRP）ほかと共催の「諸宗教対話の再考」国際会議の一部として開催されたものである。

1-2) 世界宗教者平和会議

世界宗教者平和会議（WCRP = World Conference of Religion for Peace / RfP = Religions for Peace）は、1970年、日本宗教連盟（理事長・庭野日敬）の国際問題委員会がこれを受け入れて、第1回京都大会が開催された。同大会後、国際問題委員会を発展的に解消して「世界宗教者平和会議日本委員会」（WCRP日本委員会、庭野日敬理事長）が発足した。以後、ほぼ5年に一回世界大会を開催してきた。1976年には世界宗教者平和会議のアジア版として、アジア宗教者平和会議（ACRP）が発足した。

21世紀に入ると2006年8月に、第8回大会が「あらゆる暴力をのり超え、共に全てのいのちを守るために」をテーマに、京都において開催された。2013年11月には、第9回大会がオーストリアのウィーンで開催された。これはKAICIID（「アブドゥラー国王宗教・文化間対話のための国際センター」と共催で開催された。立正佼成会の庭野光祥次代会長はKAICIIDの理事を務めている。

1-3) 世界連邦（世連）

世界連邦は世界の国々が互いに独立を保ちながら、地球規模の問題を扱う一つの民主的な政府（「世界連邦政府」）をつくることを目指す団体である。国際連合の改革と強化を通して「世界連邦」を実現し、世界各国が世界連邦政府の下で法的かつ効率的に、ひとつの秩序のもとで平和と人権を守っていくことのできる世界を築こうとする理念をもっている。

1946年、ルクセンブルクに集まって、「世界連邦運動」（WFM = World Federalist Movement）の前身である「世界政府のための世界運動」（WMWFG）を組織し、その第一回大会を翌47年に、スイスのモントルーで開催した。

日本では1948年に、広島被爆3周年を期して「世界連邦建設同盟」（初代会長・尾崎行雄）が結成された。1950年から世界連邦宣言自治体運動が展開され、同年、京都府綾部市（大本の本部所在）が「世界連邦都市宣言」第1号を行なった。1967年に各宗各派の宗教者による「世界連邦日本宗教委員会」が結成された。2012年7月の時点で、81自治体（1都2府1道17県60市区町村）が世界連邦宣言自治体全国協議会に所属し、世界連邦の実現のために努力する旨を決議している。

世界連邦日本宗教委員会（田中恆清会長）は2016年12月5日からの5日間、35回目となるハワイ平和祈念使節団を、ハワイ州オアフ島へ派遣し、総勢75名の宗教者が日本から参加した。現地時間の12月7日午前7時30分よりアリゾナ記念館で開催された米軍主催の第75回真珠湾慰霊追悼式典には、真珠湾攻撃を体験した退役軍人や軍属遺族会、また現役の将校など約4,000人が参列。式典では、国旗儀礼とハワイのカファー（司教）によるハワイの神々への祈りの儀式に続いて、田中恆清会長が同委員会を代表して、世界平和の祈りと世界平和実現へ向けたメッセージを述べた。

ハワイ平和祈念使節団のきっかけは1982年、ニューヨークの聖ヨハネ大聖堂で開催された日米宗教者会議の後、真珠湾での慰霊のためにハワイへ立ち寄ったことである。当時はまだ対日感情が悪く、真珠湾はアメリカが受けた屈辱と復讐心を忘れないための場所であり、石を投げられ「帰れ！ジャップめ！！ここはお前たち日本人が来るべき場所ではない」と罵られたこともあったという。

しかし「国のために戦った英霊を慰霊することに国境はない」という当会の宗教者の思いのもと、毎年12月7日に慰霊に訪れていたところ、アリゾナ記念館や退役軍人、現役将校、従軍宗教者、日系人をはじめハワイの多くの人々からも、彼らの慰霊の精神と世界平和への祈りに徐々に共感が示されるようになってきたという。現在では毎年、真珠湾慰霊追悼式典におけるスピーチも任せられている。

1-4) 国際宗教同志会（国宗、IRF）

国際宗教同志会は1947年に同志社総長の牧野虎次が発起人となり、金光教泉尾教会教会長の三宅歳雄の協力によって、八坂神社、カトリック京都司教区、聖公会京都教区、一燈園、大本、東西両本願寺、知恩院等が参加し、新日本建設をスローガンとして結成された。

21世紀に入っの主な国際的活動としては、2007年9月26～30日、国際宗教同志会60周年記念として「ダライ・ラマ法王訪問団」を派遣したことである。9月28日に国際宗教同志会のダライ・ラマ法王訪問団一行9名（団長：三宅善信大阪国際宗教同志会事務局長）が、北西インドのダラムサラにあるチベット亡命政府を訪れ、ダライ・ラマ14世と会談した。ミャンマーで起きた

軍事政権の民主化要求デモを行った仏教僧への発砲事件に対するダライ・ラマ法王と国際宗教同志会の共同声明を発表した。副団長は京都国際宗教同志会事務局長の西田多弋止一燈園当番、その他、大阪国際宗教同志会監事の懸野直樹野宮神社宮司、京都大学名誉教授の藺田稔秩父神社宮司、藺田建同神社権禰宜、村山博雅曹洞宗東光院副住職、嶽盛俊光曹洞宗南詢寺副住職、ラクパ・ツォコ・ダライラマ法王駐日代表部事務所長、和田富喜子大阪国際宗教同志会事務局スタッフの計9名。

1-5) その他集会

・「万国宗教会議」(1893年、1993年、以来5年ごとに開催)

2015年10月15～19日、米国ユタ州のソルトレイクシティで万国宗教会議2015が「人間の心を取り戻す：慈悲と平和と正義と持続可能性ある世界のために共に働く」をテーマに開催され、世界各地から約1万人の宗教関係者が一堂に会した。万国宗教会議の活動の経緯は1世紀以上前にさかのぼる。

コロンブスの新大陸発見400周年を記念した1893年のシカゴ万博の企画として、万国宗教会議が開催された。その精神を継承して、それから100周年に当たる1993年に、シカゴで万国宗教会議が開催されたのである。ダライ・ラマ14世や南アフリカのネルソン・マンデラ大統領などのノーベル平和賞受賞者たちを基調講演者に迎えて、これまで数年毎に、ケープタウン、バルセロナ、メルボルンと各大陸をめぐる、それぞれ数千人規模の参加者を集めて開催されてきたものである。今回の米国ソルトレイクシティでの大会では、サウジアラビアの前国王の肝入りで設立された諸宗教対話組織KAICIIDと、クレアモント・リンカーン大学がメーンスポンサーとなり、参加者数が1万人を越す大規模なものとなった。

しかしながら、この会議への日本の宗教教団からの参加は年々少なくなっているという。2015年の会議に展示ブースを設けていたのは、創価学会とBCA(浄土真宗本願寺派の米国教団)だけであった。

・比叡山宗教サミット

1986年にローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の呼びかけによってイタリア・アッ

シジで開催された「宗教者平和の祈り」を受け、1987年8月に「比叡山宗教サミット—世界宗教者平和の祈りの集い」が京都宝ヶ池プリンスホテルと比叡山延暦寺で開催された。この年は、ちょうど比叡山開創1200年の年にもあたり、山田恵諦天台座主の提唱により、日本宗教連盟傘下の5団体のほか、世界宗教者平和会議日本委員会、世界連邦日本宗教委員会の諸団体が「日本宗教代表者会議」を結成し、準備を行った。

以後、同サミットを記念する「世界平和祈りの集い」が毎年8月、天台宗などの主催により開催されており、2017年には30周年を迎えた。

なお、こうした日本の宗教連合組織の活動においては、いくつかきわめて積極的に活動に関わる教団の存在がある。特に立正佼成会、金光教泉尾教会、妙智會教団（「ありがとうインターナショナル」を主催）などは、それぞれで独自の活動を行なうとともに、ときに同じ目的のために協力するネットワークを形成している。また、国外の重要な窓口となっているのは、カトリック、ユニテリアン教会、聖エジディオ共同体などキリスト教系であったが、近年ではサウジアビア系のKAICIIDなどが関わる場合もある。さらに創価学会等の関わりも注目される。

2. 新宗連の国際活動

新日本宗教団体連合会（新宗連）は、1951年に結成された。日本国内の新宗教などが所属する連合会。立正佼成会、パーフェクトリバティー教団（PL）など、国内の64教団が所属する公益財団法人。1952年、日本宗教連盟（日宗連）に加盟（他の構成団体は、教派神道連合会・日本キリスト教連合会・全日本仏教会・神社本庁）。

新宗連は発足以来しだいに国際的な活動を展開するようになったが、これまでの主要な国際的活動としては、下記のことを挙げることができる。

1955年、「宗教世界会議」を開催 16カ国の宗教指導者が日本に集まる。

1963年、「核兵器禁止宗教者平和使節団」に庭野日敬（立正佼成会）、宮本丈靖（妙智會教団）、藤枝真和（世界救世教）などが参加。

1966年、「アジア核禁会議」に庭野日敬理事長、宮本丈靖が参加。

1970年、「世界宗教者平和会議」（WCRP I）を開催。

1982年、第2回国連軍縮特別総会で庭野理事長が演説（「IARF会長」として。なお庭野は1978年の第1回、1988年の第3回でも演説をしているが、それぞれ「世界宗教者平和会議名誉議長」、「立正佼成会会長」の立場）。また、同総会にあわせて新宗連は、全国で署名活動を実施。37,333,694人の署名を集める。さらにニューヨークへ「新宗連平和特使団」派遣。

1985年、ユニセフの要請により組織された官民合同の「アフリカに毛布をおくる会」の活動を支援。新宗連では、総計百万枚の毛布のうち半分以上を集めたと推定している。

1986年、第3回「アジア宗教者平和会議」（ACRPⅢ）にあわせ、「韓国平和使節団」を派遣。

1989年、WCRPⅤ（メルボルン大会）にあわせ、「オーストラリア・ニュージーランド平和使節団」（深田充啓団長）を派遣。

1990年、イラン大地震の被災者救援のため、1,000万円を日本赤十字社に寄託（「国際救援基金」の設置）。

1991年、湾岸戦争が勃発。「湾岸避難民救援実行委員会」に参加し、国際救援基金から2,000万円を拠出。民間機をチャーターし、難民移送を行う。

1992年、「地球サミット」（環境と開発に関する国連会議）に日本の宗教界を代表するNGOの一つとして正式に参加。

1994年、WCRPⅥ（ローマ大会）にあわせ、「イタリア平和使節団」（新井三知夫団長）を派遣。

1999年、WCRPⅦ（ヨルダン・アンマン大会）にあわせ、「中東平和使節団」を派遣。

2013年11月、WCRPⅨ（ウィーン大会）にあわせ、平和使節団を派遣。

これらによって、新宗連及びその傘下にある教団が、近隣のアジア諸国から中東に至るまで活動を展開してきていることが分かる。各種の会議のほかに、被災者救援、難民問題への協力といった具体的な支援活動も行っている。

2-1) 新宗連青年会（新日本宗教青年会連盟）

・「東南アジア青年平和使節団」

新宗連の青年組織である新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）は1962年から、国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑で戦争犠牲者慰霊と平和祈願の式典を行って

きた。この式典は、現在は「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」と呼ばれており、「8.14 式典」が通称である。「8.14 式典」を営むなかで、新宗連青年会は遺骨収集団の派遣を検討するようになった。その頃、ルポライターの竹中労を招いて学習会を開く機会があったが、竹中から「日本は被害者意識が強く、日本人だけの慰霊にこだわっている。東南アジアの人々にとって日本は加害者だ」との指摘を受けた。そこで、あらためて第二次世界大戦の実態を見つめ直すこととし、1974年、第1次東南アジア青年平和使節団（「東南アジア懺悔行」）を派遣した。日本の戦争責任を懺悔し、その犠牲となった東南アジアの人々の慰霊供養を行うという目的である。以後この活動は継続し、2018年2月には、第26次使節団が派遣された。

・ネパール支援

1968年、(社)日本キリスト教海外医療協力会の使用済み切手収集運動に全面協力し、ネパールの子どもたちに結核予防のためのBCGワクチンを送ることになった。同運動の成果を確認するため、1981年から「ネパール農業開発10年計画」としてワークキャンプを実施。全20回、延べ122人が参加した。こうした活動の延長として、1993年には「ネパールNGO連絡会」が結成された。

2-2) 新宗連加盟教団の国際活動

①立正佼成会（本部＝東京都杉並区）

立正佼成会は新宗連においてもっとも重要な役割を果たしてきている教団の1つであるが、立正佼成会としての海外活動も行っている。その中で「バターフレンドシップタワー」、「アフリカに毛布をおくる運動」、そして「一食を捧げる運動」について触れる。

・バターフレンドシップタワー（フィリピン）

1973年、庭野日敬会長の次男欽二郎（当時同会青年部長）が、フィリピンへ「青年の船」を派遣した。これは1976年まで続き、それ以降は「青年の翼」として継続されることとなった。同国モンテンルパの日本人墓地の整備などのため、帰国した団員青年らが募金活動を行ったこと、第3回青年の船（1975年）に松緑神道大和山の田澤豊弘（後の二代教主）が同行し、同教団が実施する「一

食を捧げ 一欲を節する運動」が立正佼成会会員の共感を呼び、同会が「一食を捧げる運動」に取り組むきっかけともなった。

75年には、第2次世界大戦のおりの「バターン死の行進」の始発点からほど近くに、戦争のサンゲと日比友好の願いを込め、同会青年部と現地の青年によりフレンドシップタワーを建立した。

こうした活動を基盤に21世紀もいくつかの活動がなされている。2015年4月5日から10日まで「フレンドシップタワー建立40周年記念特使団」を派遣した。このときの名誉団長は庭野光祥次代会長であり、団長は泉田和市郎青年本部長であった。またフィリピンに向かった団員は121人にのぼった。4月8日、同会会員と同会と関係の深いBCYCC（バターンキリスト教青年会）メンバー合わせて約200人が、「死の行進」の出発点からフレンドシップタワーまで行進し、タワーで記念式典を行った。

同年9月19日から23日まで「フレンドシップタワー建立40周年記念青年特使団」の団員53人が派遣され、BCYCCメンバーらとの交流、慰霊供養などが行なわれた。このようにフィリピンとの間には半世紀近くにわたる交流が継続している。

・アフリカへ毛布をおくる運動

1984年、アフリカの広範囲で発生した大干ばつの危機的状況に、ジェームス・グラント UNICEF 事務局長（当時）は全世界に対して毛布200万枚の緊急支援を呼びかけ、これを受けた日本政府は100万枚の毛布援助を表明した。官民共同の支援活動として、俳優の森繁久彌を会長とした「アフリカへ毛布を送る会」が発足し、日本全国から171万枚以上の毛布が寄せられ、エチオピアをはじめとするアフリカの国々へ届けられた。

この「アフリカへ毛布を送る会」は、当初目標としていた100万枚を大幅に上回る毛布支援を達成したことをもって、1985年7月に解散した。しかし、依然としてアフリカ各地において毛布のニーズが高いことから、その後いくつかの団体が合同事業として「アフリカへ毛布をおくる運動」を発足させ、「送る会」の活動を継承して活動を続け、現在に至っている。

現在、立正佼成会は同運動を構成する4団体（他3団体はNGOやNPO）の

うちの一つとなっている。当運動ではこれまで、さまざまな NGO や国連機関等が参加し、市民から寄せられた 411 万枚以上の毛布を、紛争・自然災害等による難民・国内避難民や困窮者に届けてきた。なぜアフリカに毛布を送るのかという疑問を呈する人もいるが、アフリカは日中は暑くても夜になると昼間から 30 度以上あるいは 40 度以上気温が下がる地域もある。そうした地域で生活をおくる人たちにとって、毛布はきわめて貴重なのである。現地に行った立正佼成会のメンバーは、そのことを実感している。

・「^{いちじき}一食を捧げる運動」

前述のとおり、立正佼成会は 1975 年から、「一食を捧げる運動」を開始した(具体的にどのようなことを行うかの例は松緑神道大和山の項で説明する)。毎月 1 日、15 日を共通の実践日と定め、同運動を継続している。約 40 年間で 136 億円以上が、貧困や飢餓への取り組みや難民支援、緊急救援・復興支援をはじめさまざまな分野で活用されてきた。上記のフィリピンでの活動、アフリカへ毛布をおくる運動等にも充てられている。この活動は、現在 UNICEF と連携して行なわれている。

②松緑神道大和山(本部＝青森県平内町)

松緑神道大和山は比較的規模の小さな教団であるが、初代教主の理念もあって、国際的活動には強い関心をしめしている。その一つが「平和一食運動」である。WCRP がきっかけとなって独自の活動を展開し、新宗連加盟教団の活動にも影響を与えている

・「^{いちじき}一食を捧げ 一欲を節する運動」(略称「平和一食運動」)

これは 1974 年、世界宗教者平和会議ベルギー・ルーベン大会(WCRP II)の際、初代教主・田澤康三郎(法名「大和小松風」)が「いつでも・どこでも・だれでも・いつまでも」できる運動として提唱したものである。毎月 18 日を「世界平和祈願日」と定め、世界中で飢えや病に苦しむ人々のことを思いながら朝食を抜き、その代金分を、世界の恵まれない人々のために捧げている。また、この日には、一欲(コーヒー、お酒、お菓子など)を節して、その浄財を、特定非営利活動法人国際連合世界食糧計画 WFP 協会、認定 NPO 法人テラ・ルネッサンス等の

団体を通して世界平和のために捧げている。

また同運動の実践活動の一環として1975年9月、第1回「大和山チャリティーバザー」を青森県五所川原市で開催。バザーはその後、北海道や東北に広がり、現在13会場で毎年催されている。バザーの益金は同様に、上記WFP、テラ・ルネッサンスなどに寄託されている。

この他、松緑神道大和山では「中華民国平和使節団」を毎年3月に派遣している。第2次世界大戦において、日本軍人として戦死した台湾人33,000名の「御霊鎮め」のため、台湾に平和使節団を派遣し、慰霊祭を行っている。2018年までに、36回にのぼる使節団が派遣されている。

③解脱会（本部＝東京都新宿区）

解脱会の本部は都内にあるが、聖地は埼玉県北本市にある。国内に6つの直轄道場、国外では、米国のハワイ、ロサンゼルス、サクラメントに教会・支部がある。国外では布教活動も行われているが、それ以外にも各種の活動を行なっている。その中で特徴的なものは、1996年から2015年3月まで、「ビバ・カンボ（募金）」を行い、カンボジアに計18の学校を建設したことである。また2015年4月から「東南アジア諸国の子どもたちの命をつなぐ募金」（愛称「まごころ募金」）として継承し、2017年からは、「ミャンマー・スタディーツアー」を派遣している。

同ツアーは「報恩行」の一つとして2015年から実施している「副食を献じる運動」「まごころ募金」の献金支援先となっているNPO法人・ジャパンハートの協力により開催している。前者は、月に一度副食を献じた分の金銭を献金する運動で、後者は、青年部を中心に、祭典時や街頭で募金活動を行っている。

「副食を献じる運動」は戦前の航空機献納運動の現代的再生とも言われるが、新宗連加盟教団の「一食を捧げ一欲を節する運動」（松緑神道大和山）、「一食を捧げる運動」（立正佼成会）等の影響もあると思われる。

また「ジャパンハート」との関係は、WCRP日本委員会の新春学習会（2015年）がきっかけとなった。解脱会の保守系の政治的スタンスとも親和性がある。ジャパンハートは、吉岡秀人医師が、第二次世界大戦のビルマ作戦の際、ミャンマーの貧しい農民たちが、多くの日本兵を助けてくれたことへの恩返しであると語っ

ている。

ちなみに2017年は3月3日から10日、10名、2018年は3月2日から9日まで、6泊8日の日程で、参加者は12名であった。

④善隣教（本部＝福岡県筑紫野市）

善隣教はとくに韓国との交流に熱心である。教団で「御神尊様」と呼ばれている教祖力久辰斎が韓国で修行した時期があったことも関係している。毎年5月、「韓国 青年平和の翼」を青年部により開催している。4月に実施する「韓国原爆被害者救済街頭募金」、「一欲^{いちよく}平和募金運動」によって集められた義援金を「韓国原爆被害者協会」へ伝達。あわせて、「反核・反戦署名活動」、西大門刑務所歴史館等での平和学習、慰霊、現地青年との交流などを行っている。2017年は5月3日から5日まで、11名が派遣された（第31回）。

韓国には、力久辰斎が青年時代に修行した「象の岩」「龍^{たつ}の岩」（北漢山）の「御行場」がある。それぞれ「善隣の道 始源之地」「善隣の道 起源之地」と呼ぶ。「象の岩」は教祖が24歳の時、修行した場所である。

1971年5月「龍の岩御行場」、翌72年5月「象の岩御行場」がそれぞれ再発見された〔善隣742:17、748:23〕。教祖の「贖罪の気持ちから『ぜひ韓国のためになる事をさせていただきたい』』という思いにより、1973年5月、「龍の岩御行場」の記念碑建立式典の際、障害者施設「明暉園」や「忠峴嬰兒園」を慰問。「明暉園」では院長の李方子妃に義援金を手渡した〔同:24〕。

この頃、力久辰斎の長男である力久隆積（教団では聖主と呼ばれる）が、新宗連を通じて、被爆者支援を行っていた「大阪市民の会」について知り、1973年11月、教祖と聖主が韓国原爆被害者協会を訪問した。翌74年5月の韓国への団参の際、力久教祖は謝罪の言葉とともに、義援金を手渡し、継続的支援を約束した〔同:25〕。

1976年5月23日、ソウルで初の「韓日親善伝道会」を開催〔善隣743:17〕。この頃までに「ソウル支部」（後に「ソウル支教会」）が発足していたとみられる（1978年8月10日、「ソウル支部布教所」が発足したという記述もある〔善隣748:25〕）。

こうしたつながりに基盤を置き、21世紀にはいっても韓国との交流は続けら

れている。善隣教と韓国とのつながりについては、2015年2月7日に国際宗教研究所主催の公開シンポジウムで、隆積を継いで教主となった力久道臣が「在韓被爆者支援と日韓青年交流」と題する発表を行なっている。

2017年9月5～6日には、ソウル市で「善隣の道『韓日親善大講演会』」を開催〔善隣 748:41〕。「韓国ビドゥルギ平和交流団実行委員会」「韓国原爆被害者2世会」会長の李太宰から感謝の記念牌が贈呈された。

善隣教は、韓国内にある教祖ゆかりの地を拠点に韓国各地で活動を展開してきているのが特徴である。

⑤ 崇教真光（本部＝岐阜県高山市）

崇教真光は、新宗連傘下の教団の中では外国人の信者が多い部類に属する。海外支部も世界各地にある。ヨーロッパ、アフリカ、北米、ラテン・アメリカ、オーストラリア・オセアニア、アジアの5方面があるが、この中で、崇教真光がもっとも多く信者を得たのはラテン・アメリカである。特に信者が多い地域に置かれる大道場は、サンパウロ、リマ、メキシコ、カラカスの4都市にある。この地域には表に示すとおり、中道場、小道場、準道場も数多くある。続くのは、ヨーロッパだが、近年特に注目されるのは、アフリカでの展開である。

崇教真光の海外拠点（2015年11月現在）

	大道場	中道場	小道場	準道場
ヨーロッパ	パリ	6	5	6
アフリカ	アビジャン	1	5	3
北米	なし	2	2	4
ラテン・アメリカ	4	4	10	11
オーストラリア・オセアニア	なし	1	2	なし
アジア	なし	1	2	2

崇教真光ホームページ <http://www.sukyomahikari.or.jp/activity/index.html>（最終閲覧日 2018年9月30日）

教団本部には、2002年8月、「真光青年会館」が開館し、第2代教え主（岡田恵珠＝「聖珠」）が「四大聖業」（ほかには「世界総本山」「光神殿」（教祖奥津城）「光記念館（ミュージアム）」建設）としていたものが達成された。同年10

月には、岡田光央が「二代教え主代理」（教主継承者）に就任し、以後、聖珠は「御み魂」の「ご調整」を中心とする「御神業」に入った。2009年6月23日、「光統継承奉告式」を実施した。2016年9月18日、聖珠が逝去する。

このように、21世紀の時期というのは、教団の国内の地盤が固まった時期であり、3代教え主が教団をリードしていく時期にあたる。南米では近年、ブラジル各都市で「宗教真光の日」（2月27日、「救い主」＝教祖岡田光玉の生誕日）が制定されており、現在34都市にのぼる〔真光663:12〕。また、光央は2016年8月、ブラジル、アルゼンチン、チリ、イースター島を巡教（「巡光」）した〔真光661〕。

宗教真光は、ヨーロッパではフランス（パリ大道場）を中心に広まった。榎尾直樹の調査〔2007〕によれば、1990年代のパリ大道場の信者構成は約半数はカリブのアフリカ系フランス人、残りが本土フランス人、フランス・ベルギーの旧植民地のブラックアフリカの移民、若干のアジア系移民だった。移民のネットワークによって、1975年、コートジボワールのアビジャン（「お浄め所」から現在は「大道場」）に伝わった。西アフリカ（サハラ以南）の地域はフランスの旧植民地であることから、公用語がフランス語であり、ヨーロッパと直行便で結ばれている。

「西アフリカに定着している真光は、特にコートディヴォワール、セネガル、ベナンにおいて非常に活発な活動」を展開していることをフレドリック・ルヴォーが紹介している〔ルヴォー2018:105〕。ルヴォーは「より小規模の公的な組織は、中央アフリカ、コンゴ（キンシャサとブラザヴィル）、ポワン・ノワール、トーゴ、シエラ・レオネ、ガボン、アンゴラに設立されている」と述べている。またセネガルには、ダカール小道場がある。信徒はほとんどセネガル人であり、ムスリムを中心にカトリック教徒がおり、中流階級、公務員、一部のエリートのアフリカ人といった人たちも含まれているとされる。

教団の資料によれば、現在アフリカでは12カ国に拠点がある〔真光654:22〕。

・アフリカの植林活動「緑の大壁プロジェクト」への参加

宗教真光のアフリカにおける活動として「緑の大壁プロジェクト」への参加がある。このプロジェクトは、2005年6月、アフリカ国家元首会議にて決定

されたものである。アフリカ大陸最西端のセネガルから、東側のジブチまで 11 カ国を跨ぎ、およそ 7000 キロメートル、幅 15 キロメートルにわたって植林する計画となっている。2006 年 8 月、崇教真光「アフリカ方面指導部」主催の「緑の大壁修練会」でセネガルを中心に青年が約 200 名集まり、植林活動（同修練会は以後毎年開催）。セネガル政府と連携し、以後、アフリカとヨーロッパの真光青年を中心に活動している。2016 年までに延べ 2569 人、最大 22 カ国からこの活動に参加し、100 万本の植林を達成。2017 年、「『緑の心』財団」を設立 [真光 654:10-31,63-65] [真光 663:30-31]。

2013 年、同活動が映画化され、2015 年 12 月の第 13 回モナコ映画祭最優秀賞「エンジェルピースアワード」を受賞。2014 年夏、コートジボワール政府から、植林に最も取り組んだ団体として表彰を受ける [真光 652:34]。2016 年 11 月 18～25 日、三代教え主が、アビジャン大道場 40 周年祭にあわせ、オーストリア・ウィーン、コートジボワール・アビジャン、セネガル・ダカール、フランス・パリを巡光している [真光 653]。

これらは、布教と社会活動が密接に関連した例であり、新宗連活動と一線を画した独自の展開と言える。

むすび

以上、新宗連加盟教団の活動は、初期には、①新宗連活動から始まったもの（アフリカへ毛布をおくる運動など）、②新宗連が創設に大きく関わった WCRP からはじまったもの（平和一食運動など）、③加盟教団相互の影響（一食と副食、ミャンマー支援など）が見られた。近年は崇教真光のように独自性の目立つ活動を展開している例も見られる。

海外で日本宗教が福祉、支援などの社会的な活動を展開する例を探すと大半は新宗教によるものである。新宗連に属していない教団のそうした活動としては、創価学会、真如苑などの例が比較的知られているが、新宗連やその傘下の教団の活動は非常に多様である。一般にはあまり紹介される機会は少ないが、そこでは多くの新しいネットワークが形成されている。

新宗連の場合は、教団単独で行われる活動と新宗連として行う活動とが相互に影響しあっていることが多く、それはグローバルなネットワークを形成する

上で大きな利点になっていることが見てとれる。

参考文献・URL

- フレドリック・ルヴォー（中尾世治訳）、2018、「セネガルにおける日本の宗教運動の環境主義—宗教真光による治癒から環境管理へ—」『年報人類学研究』第8号、南山大学。
- 檜尾直樹、2007、「フランスにおける真光の受容—背景としての憑依信仰」『宗教研究』81巻4号。
- 檜尾直樹、2009、「霊的価値論—コートジボワール・宗教真光信者の世界観の持続と変容（1975-1995）」落合雄彦編著『スピリチュアル・アフリカ—多様な宗教的実践の世界』晃洋書房。
- 『解脱』84-3（963）号、解脱会出版部、2018年3月。
- 『解脱』84-4（964）号、解脱会出版部、2018年4月。
- （公財）新日本宗教団体連合会、2013、『新宗連 宗教協力60年のあゆみ』（公財）新日本宗教団体連合会。
- 三宅善信、2018、「オランダでIARF国際評議員会開催」『いずみ』（金光教泉尾教会機関紙）72-4（814）号。
- 三宅善信、2018、「ワシントンDCでIARF世界大会開催（前編）」『いずみ』（金光教泉尾教会機関紙）72-6（816）号。
- 三宅善信、2018、「ワシントンDCでIARF世界大会開催（後編）」『いずみ』（金光教泉尾教会機関紙）72-7（817）号。
- 「21世紀はボランティアの時代—社会善化の担い手として」『産経新聞』2017年1月7日（東京版・大阪版PR特集）。
- 日本宗教代表者会議、2018、『比叡山サミット30周年記念 世界宗教者平和の祈りの集い』日本宗教代表者会議。
- 額賀章友編、2000、『WCRP世界宗教者平和会議30年史』（財）世界宗教者平和会議日本委員会。
- 立正佼成会青年本部青年グループ編、2013年、『春光』28号、立正佼成会青年本部青年グループ。
- 松緑神道大和山、発行年未詳、『Welcome to YAMATOYAMA 初めて「大和山」を訪れる方のために』宗教法人松緑神道大和山。
- 『善隣』62-6（732）号、善隣教、2016年6月。
- 『善隣』63-4（742）号、善隣教、2017年4月。

『善隣』63-5 (743)号、善隣教、2017年5月。
『善隣』63-10 (748)号、善隣教、2017年10月。
『崇教真光』55-3 (652)号、2017年3月。
『崇教真光』55-4 (653)号、2017年4月。
『崇教真光』55-5 (654)号、2017年5月。
『崇教真光』55-10 (661)号、2017年10月。
『崇教真光』55-12 (663)号、2017年12月。
上野庸平、2016、『ルポ アフリカに進出する日本の新宗教』花伝社。
アフリカへ毛布を送る運動ホームページ <http://www.mofu.org/what/history/> (最終閲覧日2019年1月26日)。
解脱会ホームページ <https://www.gedatsukai.org/gedatukai-katudou> (最終閲覧日2018年10月2日)。
解脱会青年本部ホームページ <https://www.gedatsu-seinen.com/> (最終閲覧日2018年10月2日)。
IARF 日本連絡協議会ホームページ <http://www.relnet.co.jp/jlc/iarf/index.htm> (最終閲覧日2018年5月2日)。
一食を捧げる運動ホームページ <http://www.ichijiki.org/about/message/> (最終閲覧日2019年1月26日)。
国際自由宗教連盟ホームページ <https://iarf.net/> (最終閲覧日2018年10月10日)。
国際宗教同志会ホームページ <http://www.relnet.co.jp/kokusyu/> (最終閲覧日2018年5月3日)。
レルネット http://www.relnet.co.jp/relnet/brief/2015_101519.htm (最終閲覧日2018年10月10日)。
世界連邦日本宗教委員会フェイスブック <https://www.facebook.com/sekairenpojapan/> (最終閲覧日2018年5月3日)。
世界連邦運動協会 (World Federalist Movement of Japan) ホームページ <http://www.wfmjapan.org/index.html> (最終閲覧日2018年5月3日)。
新宗連ホームページ <http://www.shinshuren.or.jp/> (最終閲覧日2019年1月26日)。
崇教真光ホームページ <http://www.sukyomahikari.or.jp/> (最終閲覧日2018年10月8日)。
松緑神道大和山ホームページ <http://www.yamatoyama.jp/sekaiheiwa.html> (最終閲覧日2019年1月26日)。
WCRP 日本委員会ホームページ <http://saas01.netcommons.net/wcrp/htdocs/> (最終閲覧日2019年1月21日)。